

## 1) 反ワクチン報道、ワクチン導入前後の疾患 2) ポリオ不活化ワクチン任意接種の是非

### ワクチンに対する疑問・反ワクチン報道について

ワクチンにより病気の恐ろしさが忘れられると必ず根拠が弱い反ワクチン報道がされる。ワクチン接種は、接種により恩恵をうけることが多いにもかかわらず、日本では、ワクチンにより病気の重症さが忘れられると、副作用をもとにワクチン接種悪の立場の報道が継続され、ワクチンの恩恵を受けないことで多数の患者が出るだけでなく死亡例・重篤な後遺症を残す例を多数だしました。この種の報道を聞いたり視たりした方の質問をしばしば受けるので、ここに過去のワクチン騒動をまとめました(子宮頸がん予防とポリオについて誤った報道があったらいい)。日本では1974年のDPTワクチン(百日咳)で2名死亡を契機とした報道があげられます。1975年DPTワクチンの3カ月接種は中止となり、新生児・乳児の百日咳が多発。100名前後以上の死亡が出たと推定されています(この他にも新生児乳児の無呼吸発作、突然死の中にも新生児乳児百日咳が多数いたことは間違いなく、研修医時代は悲惨な症例を多数経験しました)。このあと百日咳ワクチンが改良され、2歳からのDPT接種で再開されました。また、1982年のDPTワクチン報道から多くの国で接種中止となり百日咳が10-100倍増加した経緯もあります。

しかし、この数年ワクチン悪報道は是正され、定期接種の率も上がってきました(現在でも追加MRの高3接種は低い)。ワクチン接種に懐疑的なのは日本だけではないようで、ワクチン先進国アメリカでもワクチンの稀あるいは根拠に基づかない副作用?に関心を払いワクチン接種率が低下したため、百日咳の流行と多数の乳児死亡をみているようです。医学書院週刊医学界新聞、李 啓充氏の論文記事を御覧ください<http://www.igaku-shoin.co.jp/paperTop.do> (第2906号第2904号第2909号2912号 2010年10-2011年1月)。

また最近のN Engl J Med 2011; 364:97-99:January 13, 2011に、古くからの反ワクチン主義者とのつばぜり合い(戦い)の記事があります。

導入を訳すと

牛痘を天然痘に対する最初のワクチンとして導入され目覚ましい成果をあげました。1796年ジェンナーが比較実験を行い有効性を実証したものです。19世紀にはこの素晴らしい試みは全世界に広まりました(下記の絵)。しかし、猛烈な反ワクチン主義運動で痘瘡ワクチンは行わなくなり、天然痘患者激増と多数の死者がでました。

1910年、オスラー卿は、公に反ワクチン主義者の非合理性に強い不満を訴え、次回の天然痘流行期に反ワクチン主義者の10人の牛痘ワクチン接種者と10名の非接種者を受け入れ、後者には天然痘にかかった場合看病しそしてさらに彼らが死亡した場合は葬式の準備をすると申し出ました(オスラーは私が博士研究者として仕事をしたMcGill大学卒業で現在の臨床医教育の元祖です。私は文部教官時代はオスラー流の指導を目指しました)。その後約1世紀たち、ワクチンのお蔭で天然痘は根絶されましたが、私たちは新たな反ワクチン主義者と戦わざるを得ない状況です。

この論文の結論として以下の4カ条の継続が重要であるとまとめられています。

1. ワクチンに対する十分な投資の継続
2. ワクチンの稀な副作用を含めたモニター制度の創設継続と副作用時の損害補償。
3. ワクチンについての医療者・大衆を含めた教育の継続。
4. ワクチンについての、教育説得をさらに増強する。患者さんと親は、利益とリスクの比のより高いものを求めている。この過程は、教育の各過程において、科学的・論理的な考え方を増大することから始めなくてはならない。さらに、科学者・医師は、公的・私的にも協力し、正しいワクチンに対する情報、大衆の理解能力に合わせ、各言語で、多様な方法で大衆に発信する必要がある。また、誤った情報については、必要な場合は法的な対応を含めた毅然たる方針をとることが重要である。

### 新しい牛痘ワクチン接種で天然痘にならないで済むなんて素

晴らしいことだ(当時のワクチン接種の状況中央の医師とワクチン接種される婦人、天然痘後遺症で顔がめちゃくちゃになった周囲の人の喜びの様子をご覧ください) N Engl J Med 364:97-99,2011より引用 天然痘は、死亡率が高く、命が助かっても醜い痘痕を残す病気です。天然痘が流行しその恐ろしさを身近に体験している人々にとってワクチンで天然痘にかからずに済むことは大変な喜びでした。ところが、ワクチンで天然痘が減り恐ろしさが忘れられると、反ワクチン主義者の宣伝・訴訟がおこります。



THE BOSTON  
Medical and Surgical Journal.

THURSDAY, DECEMBER 22, 1910

ボストンでの感染症の状況報告

BOSTON AND NEW ENGLAND.

ACUTE INFECTIOUS DISEASES IN BOSTON.—  
For the week ending at noon, Dec. 20, 1910, there were reported to the Board of Health of Boston the following cases of acute infectious diseases: Diphtheria 35, scarlatina 32, typhoid fever 6, measles 36, smallpox 0, tuberculosis 45.

Measles(麻疹)1週間で35名、  
麻疹による死亡2名、  
ジフテリア35名中4名死亡、猩紅熱  
(溶連菌)32名中2名死亡、  
天然痘発症は0

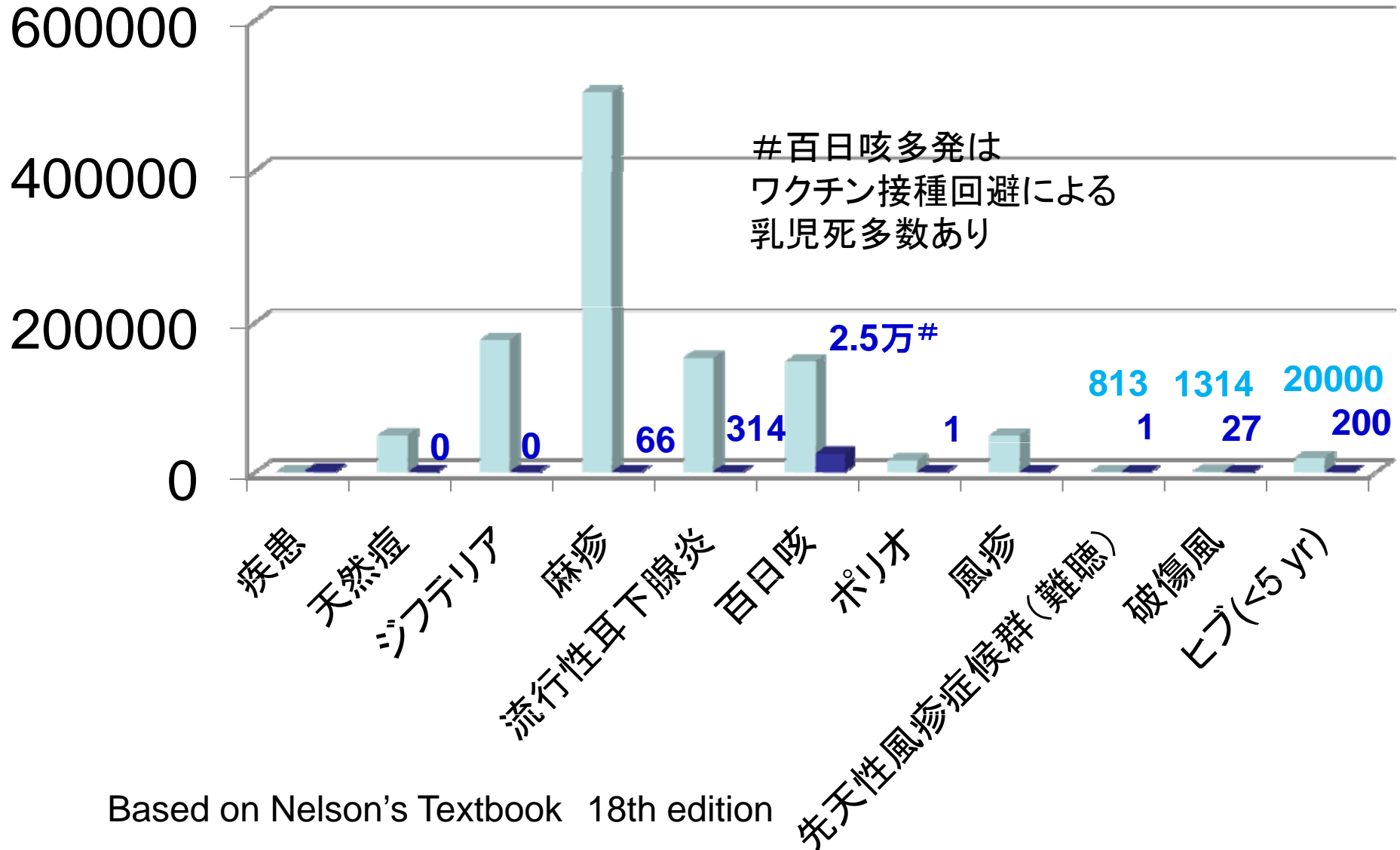
天然痘患者が減ると反ワクチン  
Osler卿が反ワクチン主義者(天然痘)に  
猛烈に怒っている記事

New England J Medicine

世界一の臨床医学誌、歴史は繰り返す  
100年前の記事:当時の感染症の状況と  
反ワクチンが同一ページに載っている。

DR. OSLER'S CHALLENGE TO THE ANTI-VACCINATIONISTS. — In an article in the *American Magazine*, on the service to the community of the control and abatement of disease and pain by medical science, Dr. William Osler says in consideration of the value of vaccination: "A great deal of literature has been distributed casting discredit upon the value of vaccination in the prevention of smallpox. I do not see how any one who has gone through epidemics as I have, or who is familiar with the history of the subject, and who has any capacity left for clear judgment, can doubt its value. Some months ago I was twitted by the editor of the *Journal of the Anti-Vaccination League* for 'a curious silence' on this subject. I would like to issue a Mount Carmel-like challenge to any ten unvaccinated priests of Baal. I will go into the next severe epidemic with ten selected vaccinated persons and ten selected unvaccinated persons. I should prefer to choose the latter — three members of parliament, three anti-vaccination doctors, if they could be found, and four anti-vaccination propagandists. And I will make this promise — neither to jeer nor to jibe when they catch the disease, but to look after them as brothers, and for the four or five who are certain to die I will try to arrange the funerals with all the pomp and ceremony of an anti-vaccination demonstration."

# 米国でのワクチン導入前導入後の患者数の比較



# 予防接種（利益/リスク）

## 利益

病気にかからない

- ・死亡率が高く重篤
- ・必ずかかる
- ・症状が長く続く
- ・後遺症が残る
- ・癌の予防

人に病気を伝染させない  
（特に集団生活で重要）

## 不利益

費用

時間（移動距離、回数）

副作用

軽微（発熱、腫れ）

重篤

後遺症・死亡

とんでも報道にさらされる

自閉症との関連

同時接種で死亡事故増加？

ワクチン当時接種でリスクが上昇することはありません  
同時接種で迅速にワクチンをうち、受診回数を減らしましょう

問題点:

ワクチンの有害事象と副作用が混同されている

ワクチン後に症状ができれば全て有害事象(交通事故も該当する)

結論:

ワクチン同時接種は1970年代から欧米で行われている

同時接種群と同時接種行わない群で死亡率は同時接種群が低い

マスコミ・親御さんが誤認する原因:

1歳未満乳児は、1年150名程度乳児突然死で原因不明の死

(喫煙者の両親で5倍、うつぶせ寝で2倍リスクが高い、

冬期風邪流行期に多い)

1歳未満の赤ちゃんが1年間5回ワクチンをうけるとすると、概ね、

ワクチン接種後1週以内の年間死亡15名は乳児突然死の紛れ込み

# ポリオワクチンによる麻痺および2次感染

## 日本で過去10年ポリオの自然発症はない

ポリオワクチンによる麻痺例 (VAPP)

日本では約440万回接種あたり1件(220万人に1名)

ポリオのワクチン接種者:弱毒のワクチンウイルスが、1~2カ月間排泄

家族にポリオと同じ症状が現れてしまうことが

日本ではこれまでに約580万回の接種あたりに1件

生ワクチンを止め、任意で不活化ワクチン4回接種を選択するか

日本ではポリオは20年以上発症がない、ワクチン被害は御免だ

(ポリオは20年以上発症がないこれはワクチンのお陰

接種率が下がると必ず日本でもポリオが出る)

# ポリオワクチンと麻痺の副作用（厚生労働省の報告）

2008年度はポリオワクチン後、6名麻痺、  
ポリオ感染の証明は1名

2歳未満麻痺伴う疾患は多い、他のウイルス感染、血管障害等による  
場合もある

第7-3表

ポリオ

予後別（回復している・回復していない別）

総数

	総数	治癒	死亡	重篤	入院	後遺症
総数	15	7			1	5
1 急性灰白髄炎(麻痺)	6	1			1	4
1A 免疫不全のない者	6	1			1	4
1B 免疫不全のある者						
1C ワクチン服用者との接触者						
2 その他の異常反応	3	1				1
3 基準外報告(全身反応)	6	5				

現状ではワクチン回数を増やして  
ポリオ不活ワクチンを接種してもメリットは少ない？

1名のワクチンポリオ発症防止に個人的負担で200億円？

歴史的には、最初のポリオワクチンは不活化ワクチン(Salk)、現在と同じ4回注射、

しかし効果は完全でなくワクチン接種後でも2545名のポリオ発症(1960年、ワクチン前は21000名)

このため現在の生ワクチンに変更になった経緯があります (pp363, Review of Medical Microbiology 10<sup>th</sup> edition, Jawetz E et al, 1972)。

	現行生ワクチン	不活化ワクチン
ワクチンによる ポリオ	1(100万件)	0
ワクチン以外の 麻痺	3件	3件
ワクチン接種移 動での事故	1	2
個人負担(1名 あたり)	交通費のみ	交通費+20,000 円

頻度の正確な公的統計は無い(立場により様々)、数字は変化する可能性があります。

2011.7.28 v2